文化財見学シリーズ 35　　姫路市教育委員会文化部文化課（平成７年９月１日）

『八幡校区』をたずねて

八幡校区は夢前川の清流が中央部を流れ、東岸に形成された沖積沃野には上蒲田（高畑、籾取、岸の上）、下蒲田（下蒲田、山所）と、西は西蒲田（西蒲田、下野）、才、則直および昭和35年（1960）夢前川整備事業により82,500平方メートルの住宅地が造成され、東夢前台４丁目、西夢前台４丁目～８丁目にわたる６つの町からなっている。現上蒲田、下蒲田、西蒲田を蒲田と総称した時代がある。

古く律令制のもとでは、当地でも漢部里、麻跡里が置かれ班田収授法が敷かれ、条里区画を示した坪名が字として残っている。たとえば才地区の東配賦や西配賦はじめ壱万田、五反田などがそれである。

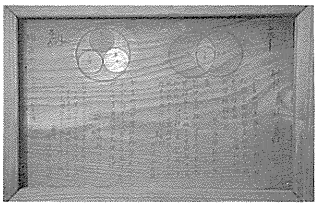
平安時代に至っては蒲田地区は余部郷に属し、堀田または発田村（開発田のこと現蒲田）、飯塚村(現下蒲田）そして菅原村（現西蒲田）の三村からなっていたようである。才は勧学院の領地であったが保号を立て英賀の保といっていたが、夢前川を界に英賀西村ともいって独立していた。

「正保郷帳」に英賀才村　松平下総守　京極刑部小輔相領　則直村は京極刑部小輔相領分と記されている。松平氏は姫路藩主となり、京極氏は龍野藩主になったので姫路藩、龍野藩の分郷地となった。

明治22年町村制施行時飾磨郡八幡村に、昭和16年飾磨郡広畑町、昭和21年に姫路市と合併した。

蒲田の古地図

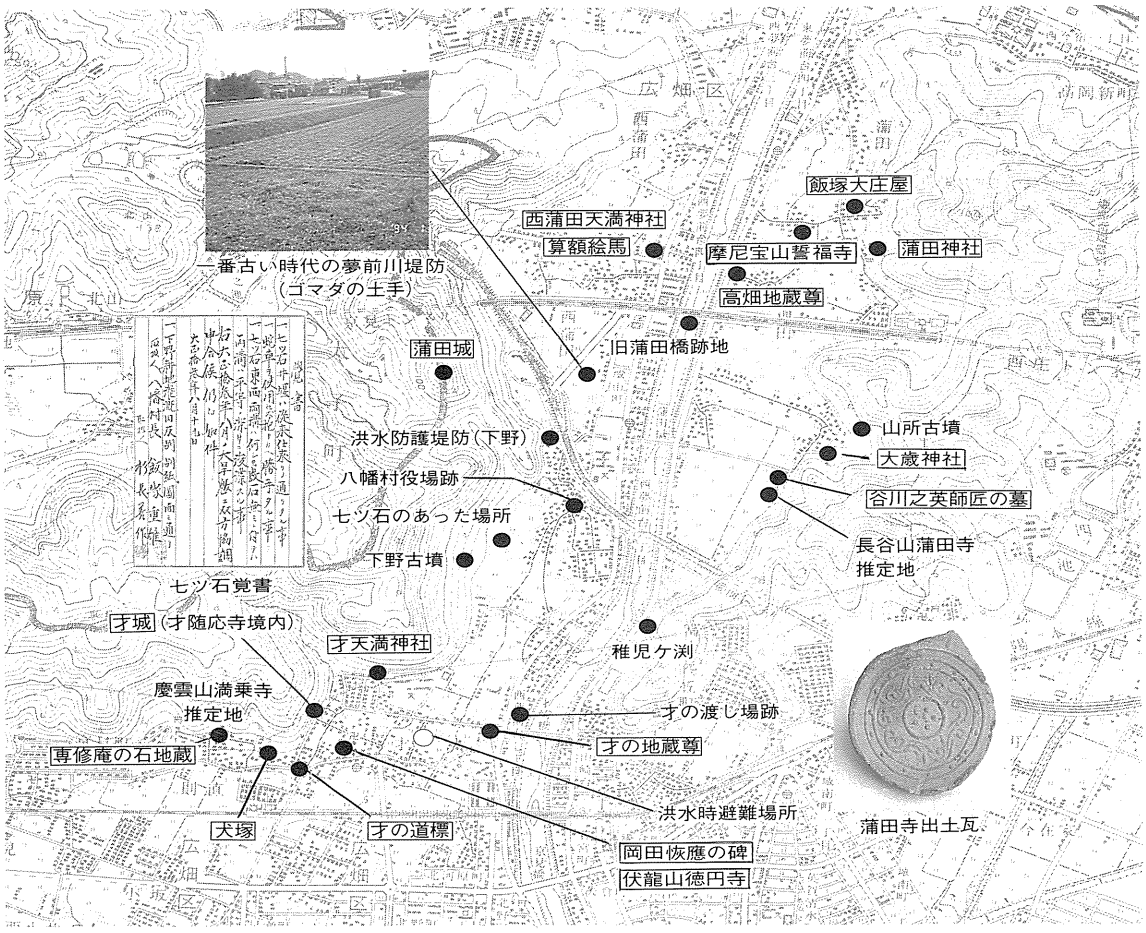
西蒲田天満神社



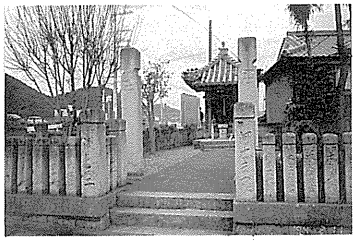
算額絵馬

西蒲田天満神社（西蒲田）　後白河法皇のころ、道真七代の孫菅原有年が皇女の執務職としてここ西蒲田に下りて政所を開いたが、それより約200年後の永享年間（1430年頃）に祖神菅公を祀ったのが西蒲田天満神社の起源とされている。明治３年社殿を再建、同21年改築、大正10年玉垣と鳥居建立、昭和60年に社殿再建。境内の楠が姫路市保存樹に指定されている。

算額絵馬　菅原孫次郎（西蒲田）が明治21年（1888）西蒲田天満宮に奉納した算額は、日本式算法（幾何学）を図解したもので極めて合理的に考案されており、西洋数学者間でも高く評価されていた。



高畑地蔵尊（蒲田）　高畑集落の入口県道沿いに地蔵堂があり、三体の地蔵尊が祀られ、五輪塔がある。戦乱の時代この地であえない最期をとげた武士たちの慰霊の塔婆と推察される。∴出逢地蔵とも言う。


高畑地蔵尊

摩尼宝山誓福寺（蒲田）　宗派は真宗大谷派、本尊は阿弥陀如来。教悟上人によって元亀２年（1571）に創建された。第２世祐心の時火災に見舞われたが再建、正式に誓福寺の名称が用いられたのは第３世教意の時からで、現在の本堂は昭和７年（1932）に完成。

摩尼宝山
誓福寺

長谷山蒲田寺（山所）　『飾磨郡誌』に蒲田寺は真言密教を説いた大寺であった。当時の住民は、寺の四方の中門内に住居していたというから寺の規模がうかがわれる。この寺は足利氏の兵乱で消滅した。

飯塚大庄屋　蒲田は、天文15年（1546）５月７日飯塚六左衛門に余部庄左右両代官職を申しつかったこともあって置塩城主赤松氏の傘下にあったといわれている。その子孫である飯塚重次は、徳川時代初期の大庄屋にして大庄屋筆頭を仰せ付けられ、蒲林地開拓奇特たりとして鎌田村と書きたる村名を蒲田と書すべき由仰せつけられた。

飯塚大庄屋

蒲田神社（蒲田岸の上）約1600年前応神天皇が播磨を巡幸された当時の住民は天皇の巡幸を喜び後になってこの地の住民は駐輦の跡に一宇を建て聖徳を偲んだという。これが蒲田神社の起源とされている。往時の社名も誉田明神（古跡便覧・播磨巡覧図絵）あるいは掘田社（播磨鑑）と呼称していたようである。明治８年になって蒲田神社と改称した。ここに貞享年間（1684頃）からの絵馬が奉納されている。また狛犬も稲岡神社や日吉神社とともに姫路独特のものである。

大歳神社（山所）　大歳神社は大歳大神を祭神とする蒲田神社の摂社である。播磨国風土記に「蒲田所祭神一座大年是五穀守衛釜所安隠豊饒之神也」とあることからも、古い時代の信仰がうかがえる。大歳神社は、蒲田神社の元宮として、東西両蒲田の氏子が５月８日を祭礼の日と定め、伝統を守り祭典を執行している。境内の狛犬は天保６年（1835）に奉納されたもので市内でも古い部類に属する。

固寧倉扁額（下蒲田）　江戸時代初期に社倉法と称し飢饉や災害に備え、米や麦を蓄える倉を設けるようになった。固寧倉の名は中国の書経「民は惟れ邦の本、本固ければ、邦寧し」の語より選ばれたといわれている。揮毫は林檉宇。

谷川之英師匠の墓碑　幕末の頃、江戸からこの地に来た武士があった。学識が豊かで請われるままに寺小屋を開いた。この寺小屋は、明治初年学制が布告されるまで続いた。門弟が建てた墓碑が蒲田霊苑に残っている。

蒲田城（西蒲田字平山）　『播磨鑑』には「蒲田構居は蒲田村にあり、領主は別所右衛門　大永の頃（1520代）」とあり、兵庫県教育委員会の調査書には、この地に城跡間違いなしと想定している。

ここから北には、赤松の本城置塩城が、東には現存する姫路城、南には英賀城、飾磨の海港、また西は龍野城が望める。従ってこの城が重要な位置にあったことが伺える。

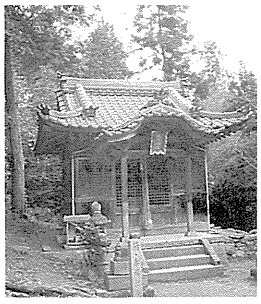
洪水とたたかう下野と才　明暦元年（1655）姫路城主、榊原忠次は、鹿谷、置塩を経て御立、田寺、辻井、今宿、荒川と南下した川を横関でせき、菅生川に直接合流一本化させた。このことによって南の青山、蒲田、才地区は洪水に悩まされた。その対策の一部である土塁が下野坂口から東西約700メートル（今はほとんどない）と集落入口のせき近年まで板挿入溝が現存していた。また才「高尾」は高さ２メートル、広さ１ヘクタールに及ぶ大地を造成し住民の避難所として明治14年（1881）につくられた。∴現況畑地

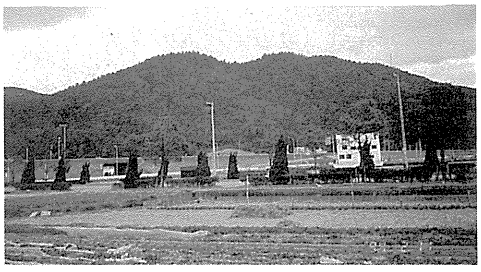
才の地蔵尊　禅宗の僧玄達坊が諸国巡礼の托鉢修行の途中才の河原の渡し場に立ち寄って荒れる川の鎮護と村人の幸せを念じ、約３年かかって３メートルもある巨大な地蔵菩薩を村人の協力で建立した。石仏は塩市邑（現高砂市）石工倉本伊兵衛によって造られた。

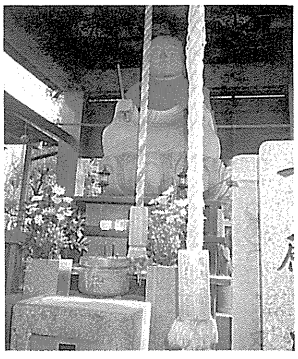
蒲　田　神　社

固寧倉扁額（飯塚氏所蔵）

谷川之英師匠の墓


大歳神社（山所）


蒲田城跡遠望（西蒲田字平山）


才の地蔵尊

才の道標

才天満神社　祭神は英賀姫大神・菅原道真。才天満神社の創祀は極めて古いとされている。また天満神社には、往古より大般若経があり、毎年６月１日、書写の僧が来て村人を法席に集め大般若経を読んだことは有名である。

境内には大正13年（1924）に起こった水争いの際に設置した七ツ石、狛犬（1821）、大鳥居（1859）、手洗石（1791）、力石などがある。

伏龍山徳円寺（才）　宗派は浄土真宗本派（西本願寺派）本尊は阿弥陀如来。本寺は、後柏原天皇の永正８年(1511)教順によって開基されている。永正12年（1515）６月２日本堂完成、延宝２年（1674）本堂が焼失したが６世正応がこれを再建した。

岡田恢應の碑　幼少より頭脳明晰で漢学は龍野藩儒の俣野啄に学び、のち長崎に遊学し英語を研究する。のち昼は小学校の教育、夜は篤学者を教える。明治15年（1882）私立伏龍学校を創立した。門人達が頌徳碑を建設し高徳を追慕している。

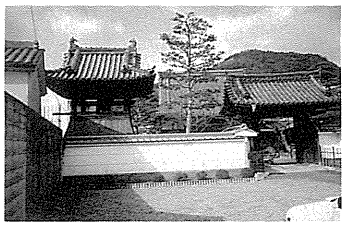
才の道標　室津道の道しるべ、天保９年（1838）建立「左あぼし　むろ津・右たつの　びぜん」と記してある。

才城（才随応寺境内）　『播磨鑑』には「才村構居　英賀郷才村領主は才伊三郎　置塩城義祐の弟」と、また同書別項には才構領主は横野四郎左衛門とある。『飾磨郡誌』には「才構居は伊三郎政直、置塩城主赤松晴政の子にして義祐の兄（大原譜上）とあり、境内には仏殿をはじめ五輪塔を含む墓石が建ち並んでいる。

書写山円教寺と才の犬塚　書写山円教寺で毎年１月18日行われる修正会（鬼追式）に英賀西（現才）の14人が招待される。円教寺は式場に才からの出席者の特別席を設け昼食を提供し歓待する習わしになっている。才からは糯米５斗を寄進して鏡餅を作り今も「英賀西村中」の名を掲げて供えることになっている。当時性空上人が才（現在の則直）に慶雲山満乗寺（円教寺分院）を建立。この分院に人語を聞き分け、書状を首に掛けて本院との間を使する賢犬がいた。この犬が病死したので村人たちは丁重に葬り塚を造り松を植えて弔った。これが才の犬塚である。

専修庵の石地蔵　『飾磨郡誌』によれば、昔はこの土地に慶雲山満乗寺と称する書写山円教寺の別院があったが、足利の兵乱によって破壊され、上の坊という字名だけが残ってる。今は堂内に石仏一体だけが安置してある。満乗寺といわれていた頃の本尊で、古風ながら優れた作品で、大和満味上人の作といわれている。

古墳群　下野古墳、山所古墳、鶴が峰古墳、才古墳等がある。何れも古墳時代後期（６世紀）のものとされている。


伏龍山
徳円寺

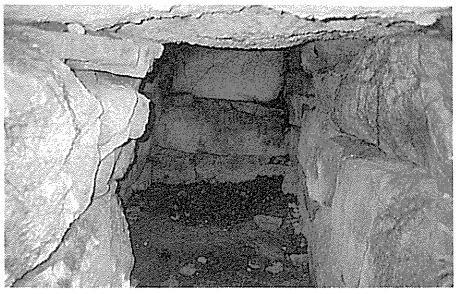
才天満神社

才城跡
（才随応寺
境内）

岡田恢應の碑

才の犬塚

専修庵の
石地蔵


下野古墳入口

■編　集　　隅田　重雄・河本　一義・正木　喜三一・黒田　勝範・大西　康嗣・川口　照子